FIFA U-20 Women's World Cup Papua New Guinea 2016

【報告：JFA Technical Study Group】

１．大会全般

１）大会概要

〇大会期間　2016 年 11 月 13 日(日)～12 月 3 日(土)

〇試合会場　開催国　パプアニューギニア

開催都市・会場

ポートモレスビー（４会場）

National Football Stadium（天然芝）

Sir John Guise Stadium（天然芝）

PNG Football Stadium（天然芝）

Bava Park（天然芝）

〇参加国　各大陸予選を突破した 15 チームと開催国を加えた 16 チーム

ヨーロッパ：4　アフリカ：2　北中米：3　南米：2

アジア：3　オセアニア：1　開催国：1

〇大会方式

【グループステージ】

4 グループ　4 チームによる総当たりリーグ戦

各グループ上位 2 チームがノックアウトステージへ進出

試合時間 90 分（前後半 45 分）3 名までの交代

【ノックアウトステージ】

グループステージを勝ち上がった、8 チームによる

ノックアウト方式（同点の場合は延長戦、それでも決しない場合 PK 戦）

試合時間 90 分（前後半 45 分）　延長戦 30 分（前後半 15 分）

3 名までの交代 +延長戦に関してはもう 1 名の交代が認められる（合計 4 名）

＊全試合　クーリングブレイクの適用（WGBT 計 計測により）

前後半 30 分経過時点で、3 分間のブレイク、

ベンチ前、タッチライン際での飲水、アイシングなど、

戦術的指示も可能

２）大会結果、表彰

優勝：朝鮮民主主義人民共和国　準優勝：フランス　3 位：日本

フェアープレー賞：日本

Golden Ball：杉田 妃和（日本）

Golden Boot：上野 真実（日本）

Golden Glove：Mylene Chavaz（フランス）

３）大会の様子

FIFA U-20 Women's World Cup（以下 U20WWC と表記）は、2008 年に第一回大会が、チリで U20WWC として開催され、今大会で 5 回目を迎えた。過去には 2002 年 U19 女子世界選手権としてカナダで開催され、2004 年タイ大会、2006 年には U20 女子世界選手権としてロシアで開催されていた。また、2012 年にはウズベキスタンで開催予定であったが、諸事情により日本での代替開催となり 2012 年に女子の FIFA 大会が初めて日本で開催された。2010 年ドイツ大会、2014 年カナダ大会と FIFA Women's World Cup（以下 WWC と表記）開催の前年に行わる U20WWC は WWC のプレ大会として開催地で行われた。

今大会は、パプアニューギニアでの開催となり、FIFA 主催の大会開催が初めてであったが、首都、ポートモレスビーの 4 会場（全てが天然芝）を使用しコンパクトな大会で、スタジアムには多くの観客が集まった。決勝には 1 万 5000 人の観客が集まりスタジアムは超満員となり、その他のゲームでも各国を応援するサポーターグループを作り、お揃いの T シャツや応援グッズ、ペインティング、伝統的な民族衣装での応援などで大会を盛り上げていた。また、今大会は南半球、赤道南下と環境面で厳しい状況の中での大会となった。キックオフ時間は 16 時と 19 時（ノックアウトステージは 19 時 30 分）と大きく 2 つの時間帯となり、日差しの強い 16 時キックオフのゲームは非常に厳しい暑さの中でのゲームとなった。大会規定により、WGBT 計測のうえ、クーリングブレイクが適用され、前後半共に 30 分経過の時点で 3 分間のブレイクとなり、ベンチ前のタッチライン際で飲水やアイシング（身体を冷やす）など行い、監督やコーチの指示も認められていた。計測値により、結果的に全試合でクーリングブレイクが適用された。厳しい環境の中、3 週間で最大 6 ゲームを戦い抜かなくてはならない今回の大会においては、フィジカル面や、メンタル面、コンディション調整など、大会を勝ち抜く、あらゆる面での強よさやタフさも求められる大会となった。その中で、Final は、U17、U20WWC ではコンスタントに上位進出している朝鮮民主主義人民共和国と、ここ数年各年代で成長し続けているフランスとの闘いとなり、3-1 で朝鮮民主主義人民共和国が勝利し、 １０月にヨルダンで行われた U17 FIFA Women's World Cup に続き、2016 年の FIFA アンダーカテゴリーの 2 大会での優勝となった。

２．大会のトレンド

「よりテクニカルに、スピーディーに、コレクティブに、そしてタフに」トップレベルの進化

2015 年に行われた FIFA Women's World Cup CANADA 2015 において、JFA の TSG がトレンドとして「よりテクニカルに、スピーディーに、コレクティブに、そしてタフに」と報告している。今回の大会でも全体的にも向上している傾向にあり、トップレベルのチームに関しては、より進化している傾向にある。

特に、全体的なスピーディーさ、タフという部分では、U17 FIFA Women's World Cup（以下 U17WWC と表記）でも進化が見られたが、そこからさらに大きな進化が見られ、女子のフル代表に近づいている。攻守の切り替えにおけるスピーディーさ、ボールを奪うスピーディーさ、ゴールを奪う為のスピーディーさと、随所にスピーディーになっている場面が見られ、世界のトップレベルの戦いにおいては、フィジカル面や判断の面でもスピードが求められるようになっている。タフさという部分でも 1vs1 の攻守におけるボールの奪い合い、ミドルサードでの激しい攻防、ゴール前でのゴールを奪う、ゴールを守るといった攻防、90 分間（延長戦含め 120 分）攻守に関わり続けハードワークし、走りきる強さが見られ、この年代でもあらゆる面でのタフさが求められるようになった。

３．技術・戦術的分析

１）攻撃

「ゴールを奪う」という意識は、世界の厳しい戦いや世界で勝ち抜くために、非常に重要な要素であることを改めて感じた。選手の個においては、ゴールを奪う為のボールの止め方、運び方、スピード、ゴールへ向かう推進力など、世界のトップレベルの闘いでは、個の能力が高い選手の存在があった。特にフランス、アメリカ、スペイン、ブラジルなどは、前線の選手やサイドアタッカーに特徴があり、個で突破する意識やゴールへ向かう意識、スピードを伴いながらの技術の発揮などゴールを決められる選手がいた。全体的にサイド攻撃からの得点傾向があり、サイドアタッカーを起点に攻撃を作り、得点に結びつけている傾向にあった。攻撃におけるコレクティブという部分では、ボールポゼッションを志向するチームが増え、GK も含めた後方からの組み立てをしていくものの、ミドルサードからアタッキングサードでの攻撃の組み立て、ゴール前での崩しという部分では、効果的なシーンは多くは見られず、シンプルなダイレクトプレーや個の能力に頼る仕掛け、サイド攻撃が多く見られる結果となった。その中で、日本（1-4-4-2）は、テクニカルに、そしてコレクティブに攻撃を組み立て、守備組織が構築されている中でも、相手の間でボールを受け、空いたスペースを有効に使い、守備組織を崩しゴールに向かっていた。日本が攻撃においても主導権を握り、各国に対して優位さが見えた点であり、Japan's Way を具現化していた部分であった。その他、Final に進んだ、朝鮮民主主義人民共和国、フランスの 2 チームもコレクティブにそれぞれの選手が役割を持ち関わりながら各国の特徴を生かしていた。朝鮮民主主義人民共和国（1-4-4-2）は 2CFW を起点として、攻撃を組み立て、多くの選手がハードワークし関わりを持ちながら、攻撃を組み立てていた。フランス（1-4-4-2）は、サイドを起点としているが両 SB の関わりや攻守に効果的に関わるボランチなど全体的にバランスが良く攻撃を組み立てていた。

２）守備

守備においては、個のボールを奪う意識やアプローチのスピード、距離、間合い、対応力、球際の厳しさ、奪いきる力など、1vs1 の守備能力の重要性を改めて感じた。U20 の年代は、フィジカルの面でも身体がフィットしバランスも整ってくる年代となり、ボールを奪う為の対応や状況判断、ボールを奪う為のテクニックなど、この年代でも世界のトップクラスに近いシーンが多く見られ、この点は大きく進化していると感じた。チームとしても 3 ラインを形成しコンパクトにコレクティブに守備組織を構築する傾向が見られた。特にドイツ（1-4-4-2）は、ベスト８での敗退（フランスに敗れ）となったが個のボールを奪う意識や奪いきる力、組織として守備を構築しコンパクトにした中で、それぞれのゾーンに入ってきた所へのプレスバックを含め、狙いを持った守備でボールを奪っていた。日本（1-4-4-2）もコンパクトに保ちながら前線の選手の意図のあるチェイシングや状況に応じた DF ラインのコントロールが細かく行われ、相手選手やスペースだけでなく、パスコースや相手の状況に応じて適切に対応し、コレクティブに守備組織を構築していた。優勝した朝鮮民主主義人民共和国（1-4-4-2）は、それぞれの選手がハードワークし 1vs1 や競り合いなど厳しく、粘り強く、人数をかけて対応する守備をしていた。

また、大会を通して、攻守の切り替えが早く、ボールを失った瞬間に守備組織を構築するチームも多く見られた。逆に素早く守備組織を作れずカウンターや隙を突かれて失点をするケースも見られ、個の守備の対応能力、チームとして組織として守備を構築し、コレクティブに構築していくことが今後も重要であると感じた。

３）切り替え

今大会でも、ゲームがスピーディーに展開されていく中で、攻守の切り替えが非常に速くなり、重要なファクターとなっていた。特に攻撃から守備への切り替えはより速くなっており、ボールを失った瞬間に切り替えて、ボールを奪い返しに行く戦術や、一度帰陣して守備組織を整えてからボールを奪い返しに行くなど、チーム戦術の理解や役割も高まっている傾向にあった。また、攻守一体という部分では、良い形の攻撃から素早く切り替えることで良い守備につながり、ボールを失ってもすぐに奪い返し、再び攻撃に繋げるという形もみられた。守備から攻撃の切り替えに関しても、カウンターの意識やゴールへの意識も高く、ボールを奪った瞬間に周りの選手のゴールへ向かう動き出しや仕掛けなどが見られ、現代の女子サッカーの中でも守備組織が構築されている中で、切り替えでの一瞬の隙を突く攻撃や守備組織が整う前に攻撃を仕掛けていくことが需要であると感じた。そして、切り替えのスピードや一瞬の判断スピード、攻守の切り替えが激しくなる中でのタフさなど、U20 年代でも求められるものとなっていた。

４）ゴールキーパー（GK）

GK として「ボールを奪う」「ゴールを守る」「ゴールを奪う」という点や攻守への関わり、イージーなミスからの失点も少なく、全体的に向上をしていた。また、登録選手（48 名）の平均身長は 172.2cm 175cm 以上は 1/3 の 16 人（うち 180cm 以上は 3 人）と大型化している傾向にあった。（日本の GK3 名平均身長 171.3cm）

「ボールを奪う」という点では、守備範囲が広くなり、ブレイクアウェイにより、DF ライン背後のスペースをケアする意識や、ペナルティーエリアを出て足でプレーするシーンも見られた。クロスにおいても守備範囲が広くなり、低くスピードのあるニアに入ってくるボールの対応やファーに入ってくるボールとクロスに対応するプレーが難しくなっている中で、GK が積極的に堅実にボールを奪うシーンや相手選手にシュートを打たせないように「弾く」判断をして、パンチングやディフレクティングを用いて的確に判断してプレーしているシーンが見られた。「ゴールを守る」という点でも良い準備や身体能力、ディフレクティングなどを用いながらシュートに対する守備範囲も広くなっていた。「ゴールを奪う」という点では、攻撃に関わり、状況に応じて判断して配球するシーンや積極的にサポートポジションをとりながら味方選手からバックパスを受けて新たな攻撃を組み立てていくシーンも見られた。そして、有効なパスとなるようなパスの質や、飛距離、正確性なども求められるものとなっていた。その中で、Golden Glove を受賞しチームも準優勝となったフランス①Mylene CHAVAS（178cm 18 歳）は、18 歳という若さであったが、フットボーラーとしての能力や理解が高く、安定したゴールキーピングや守備範囲の広さ、攻撃における積極的な関わりや、冷静に判断して的確なパスを配球し攻撃の組み立ての起点となっていた。日本①平尾知佳は、目立ったプレーは多くはなかったが、安定したプレーで堅実なゴールキーピングをみせていた。クロスに対するプレーに関しても、DF と連携しながら積極的にボールを奪うシーンやパンチングで局面を回避するシーンも見られ、状況に応じて適切に判断しプレーしていた。また、攻撃にも積極的に関わり、攻撃参加データの成功率は非常に高い数値となっていた。（準決勝 vs フランス 成功率 93.5%　３位決定戦 vs アメリカ 成功率 84.6%）

５）セットプレー

データ（FIFA TSG）を見ても、全体の得点が 113 点（1 試合平均 3.53 点）、オープンプレーが 84 点、セットプレー（FIFA：セットピース）が 29 点と全体の 25.7%がセットプレーからの得点となり、割合は前回のカナダ大会よりは少なくなっているが、得点数は大きく変わらず、セットプレーの重要性を改めて感じた大会となった。また、拮抗するゲームの中で決定づける得点や勝負を決めるシーンはセットプレーからもみられた。また、コーナーキック（CK）の得点も前大会と変わらないが、上位進出したチームは様々なパターンでショートコーナーや入り方の動きの変化などで工夫が見られ、CK における守備の構築や配置といったチームオーガナイズをより高めていかなくてはならないと感じた。フリーキック（FK）においても直接フリーキックは多くはないが、フリックや変化のある FK に対しての対応も求められるものとなっている。ペナルティーキック（PK）もセットプレーの 1/3 が PK による得点で、当たり前のことだが、ペナルティーエリア内でのファールや PK に対しての GK の対応、2nd プレーに対する準備なども重要であると感じた。今後もセットプレーの重要性は変わることもなく、セットプレーにおけるキッカーのキックの質や正確性、攻撃におけるチーム戦術も高まってきている傾向にあり、世界で闘ううえでも世界で勝ち抜いていくためにも非常に重要なものである。

【得点データ】

U20 Women's World Cup	2012 日本【32試合】		2014 カナダ【32試合】		2016 パプアニューギニア【32試合】	
総得点	104		102		113	
1試合平均得点	3. 25		3. 19		3. 53	
グループステージ OP/SP	83	OP：64 SP：19	76	OP：54 SP：22	89	OP：69 SP：20
ノックアウトステージ OP/SP	21	OP：19 SP：2	26	OP：18 SP：8	24	OP：15 SP：9

U20 Women's World Cup	2012 日本【32試合】	2014 カナダ【32試合】	2016 パプアニューギニア【32試合】
セットピース	21（20.2%）	30（29.4%）	29（25.7%）
コーナーキック	6（L：1 R：5）	11（L：2 R：9）	11（L：5 R：6）
フリーキックから直接得点	4	0	2
フリーキックからのプレーで得点	6	8	5
ペナルティーキック	5	11	10
スローインからのプレーで得点	0	0	1

［FIFA U-20 Women's World Cup Papua New Guinea 2016 TECHNICAL REPORT AND STATISTICS］

４．チーム分析

【朝鮮民主主義人民共和国】（システム：1-4-4-2）

攻守においてシステマチックに、球際の強さ、切り替えの速さ、運動量、ハードワークがすべての試合で行われていた。⑳KIM So Hyang　⑦RI Kyong Hyang　⑥WI Jong Sim それぞれタイプの違う FW を起点として、ポストプレーから攻撃を組み立てていた。

パス＆ムーブの意識や、ゴール前でのリバウンドへの意識も高く、ゴールやボールへの執着心は非常に高い。守備においても積極的に高い位置からボールを奪いに行き、ポジショニングは決して良いとはいえないが、人数をかけてボールを奪う。

［SP］守備：マンツーマン　攻撃：ショートコーナーやゴール前への入り方など変化があり、いくつかのパターンを用いていた。

【フランス】（システム：1-4-4-2）

攻守においてコレクティブに主導権を握りながら闘い、攻守の切り替えが速く、全体的に非常にスピーディーで個人の能力も全体的に高い。特に中盤の⑧GEYORO Grace が攻守のバランスをとり、SB③KARCHAOUI Sakina の個人の能力を生かした積極的な攻撃参加とスピード、SH⑦CASCARINO Delphine　⑪FLEURY Louise ゴールへ向かうスピードとテクニック。守備においては、ボールを奪う意識が高く人に対しても強い CDF④CISSOKO Hawa。GK①Mylene CHAVAS 攻守に積極的に関わりサッカー理解も高く堅実なゴールキーピングをし、チームに貢献していた。

［SP］　守備：マンマーク　攻撃：ショートコーナーやゴール前での動き工夫がある。

【ドイツ】（システム：1-4-2-2）

攻守において組織的。すべてのアベレージが高く、大型選手が多く存在し、力強よさと、前にボールを運ぶ意識も高い。フル代表と同じく、GK から組み立ててボールを動かし、FW ⑱SANDERS Stefanie を起点にし、サイド攻撃や DF 背後への狙いなどでシンプルにゴールを目指す。攻守の切り替えが速く、特に攻撃から守備へのハードワークが見られコレクティブにボールを奪う。ボールへの集中は高い。個人のアプローチの距離、プレスバックの徹底。３ラインを形成し、コンパクトに守備組織を構築していた

［SP］守備　：ゾーン（マークは２名）　攻撃：　ゴール前に３人配置

【スペイン】（システム：1-4-3-3）

３トップのセンターに⑳GARCIA Lucia 両サイド⑩FALCON Andrea ⑦GARCIA Nahikari がワイドにポジションをとる。GK から攻撃を組み立て、DF ラインやボランチを含めてボールを動かし、サイド⑩⑦を起点に個人の突破から素早いクロス攻撃。

DF もボールを奪う意識や素早いアプローチなど見られた。特に日本戦では、素早いアプローチと狙いのある守備で主導権を握る闘いをしていた。

［SP］守備：マンマーク　攻撃：ショートコーナーなど変化をつける攻撃。

５．日本の闘い

１）高い平均点と大会結果

日本はグループリーグにおいてナイジェリア、スペイン、カナダとの 3 試合。ノックアウトステージでは準々決勝のブラジル戦、準決勝のフランス戦、3 位決定戦のアメリカ戦と合計 6 試合を闘い、3 位という成績で大会を終えた。チームの目標としていた優勝には届かなかったものの、観るものを魅了する素晴らしい闘いを見せてくれた。そのため、試合を重ねるごとに日本を応援する人が増えていき、試合後には日本を賞賛する声が度々聞かれた。同じ日本人として誇らしい気持ちで大会の視察することができた。しかし、優勝することができなかった事実を受け止め、次のステージであるワールドカップやオリンピックの舞台でなでしこジャパンとして世界一を目指すためにも、今大会での「日本の闘い」を振返り、さらには日本の女子サッカーの育成年代への示唆としたい。

２）日本らしさ

日本は 6 試合を通して試合の主導権を握って闘うことができた。グループリーグ 2 戦目のスペイン戦は日本のボール支配率 49%に対しスペイン 51%とやや下回ったが、その他の 5 試合での日本のボール支配率はいずれも 60%以上だった。そのベースとなったものが個々の高いテクニックを活かしたコレクティブなサッカーであった。とくに攻撃においては GK も含めたビルドアップから攻撃の優先順位を意識しつつ、ボール保持者へ意図的に関わる人数が多いため、ボール保持者がたくさんの選択肢を持ってプレーすることができていた。攻守の切り替えが速く、運動量も豊富で 90 分間、フランス戦では 120 分間、足が止まることは無かった。FW の選手がタイミング良くスペースに走り込み、時には中盤まで下がってボールを受けて攻撃の起点となり、MF や SB の選手がボールを追い越して高い位置で起点になる回数も多く、流動性も高かった。局面における個々のアイデアと組織力が融合し、まさに Japan's Way をピッチ上で体現したといえる内容であった。守備面でも GK を中心に安定感があり、DF ラインがコントロールされて常にコンパクトに保たれた中で組織的な守備をおこなった。2 人のボランチが攻守両面にバランス良く関わりながらゲームをコントロールしたことも安定感のある闘いができた大きな要因といえる。

３）スペイン戦で見せた脆さ

しかし、日本のこうした闘い方に対し、強豪国は綿密に分析し、対策を練って臨んできた。そのためスペイン戦では日本のウィークポイントを明確に指摘され 0－1 で敗れる結果となった。2014 にコスタリカで開催された U-17WWC では日本が優勝したが、そのグループリーグの初戦と決勝戦で 2 度対戦した相手がスペインであり、どちらのチームにもその時のメンバーが今大会には多く出場していた。スペインにとってはまさにリベンジの対戦であったと言える。多くのチームが攻守の切り替わりにおいて前線の選手がボール保持者を牽制しているうちに、中盤と DF ラインを整え、守備の組織を作ることを優先したが、この日のスペインは日本の GK からの丁寧なビルドアップに対し、スピードのある FW が高い位置から積極的にボールへのアプローチを繰り返し、連動した守備からボール奪取を試みた。意図的な守備から素早く攻撃に移る様は日本のプレースタイルそのものであり、スピードに乗ったアプローチは迫力があり、ボールそのものへしっかりと寄せ切られるために、日本の選手はそのプレッシャーの回避に手を焼いた。特にボランチがスペインの中盤からのプレッシャーで DF ラインからのボールを受けることができず、効果的に組み立てに関わる回数が少なかった。そのため、中盤でボールを支配し、安

定したポゼッ

ションから FW とのコンビネーションでゴールに迫る日本のサッカーをすることができなかった。徹底してプレッシャーをかけられた時に相手を外すテクニックや数的優位を作ってボールを動かしながらプレッシャーを回避することができなかった。更に、守備においても日本は課題を残した。組織的な守備のもとにアプローチの連続からボールを奪うことが日本の特長であるが、人数をかけて囲むまではできても、それぞれに距離を取って囲むだけで終わる場面が多かった。ナイジェリアやカナダとの対戦ではそれでも相手のミスを誘発しボールを奪うことができたが、スペイン、フランスのようなテクニックとスピードを兼ね備えた相手からは人数をかけて囲むだけではボールを奪うことができず、囲んだ数人の選手が置き去りにされる場面が何度も見られた。1stDF が相手に寄せ切りボールを奪うことが必要だが、日本の選手は相手との距離を詰めることができないのは全てのカテゴリーで共通している課題といえる。またヘディングも常に課題としてあげられている。今大会の日本は DF ラインでのヘディングは相手と競りながらでも対応出来るようになってきているが、中盤での競り合いのヘディングは課題である。体格差を考慮し、ストロングポイントにできないまでも明らかなウィークである現状は早急に改善の必要がある。

６．「Japan's Way」　“「なでしこ」らしい闘いをめざして”

朝鮮民主主義人民共和国、フランス、アメリカ、スペイン、ドイツといった世界のトップレベルとの対戦では、お互いがコレクティブにハードワークする闘いとなることは間違いない。また、世界の女子サッカーは日々進化し、今大会でも挙げたようにスピーディーでタフさは高まっていく傾向にある。日本はフィジカル面でのパワーやスピードといった要素で他の国々からアドバンテージが得ることは難しいが、フィジカルの強化を避けて通ることは出来ない。フィジカルの要素の中でも敏捷性や持久力には優れている。これらの特長をさらに伸ばし、厳しいプレッシャーの中でも通用するテクニックの向上に徹底的に取り組む必要がある。そして、守備における個人でボールを奪うためのアプローチのスピードと相手との間合いにこだわり、球際の厳しさを日常でのスタンダードとしたい。そうすることで組織力、運動量、駆け引きする力、最後まで諦めない精神力といった日本のストロングをさらに際立たせることができると考えられる。

今大会を通して「ヤングなでしこ」は、攻守に主導権を握りながら闘い、「Japan's Way」を具現化し、世界に改めて「なでしこ」のサッカーを魅せた大会になったのではないかと思う。ただ、最後の勝ち負けという部分や世界で闘う中での「1vs1 の対応」、日本の生命線でもあるテクニカルにコレクティブに闘う為の「パスの強さと質とタイミング」、そして、勝負を決める「ゴール前での攻防」「ゴールを奪う、決めきる」、「ゴールを守りきる」という点を更に高めていかなくては世界のトップで居続けることは不可能である。世界が進化し続けている中で、「なでしこ」の良さを高め、継承し続けることが重要であり、各年代で「本気」で取り組んでいかなくてはならない。